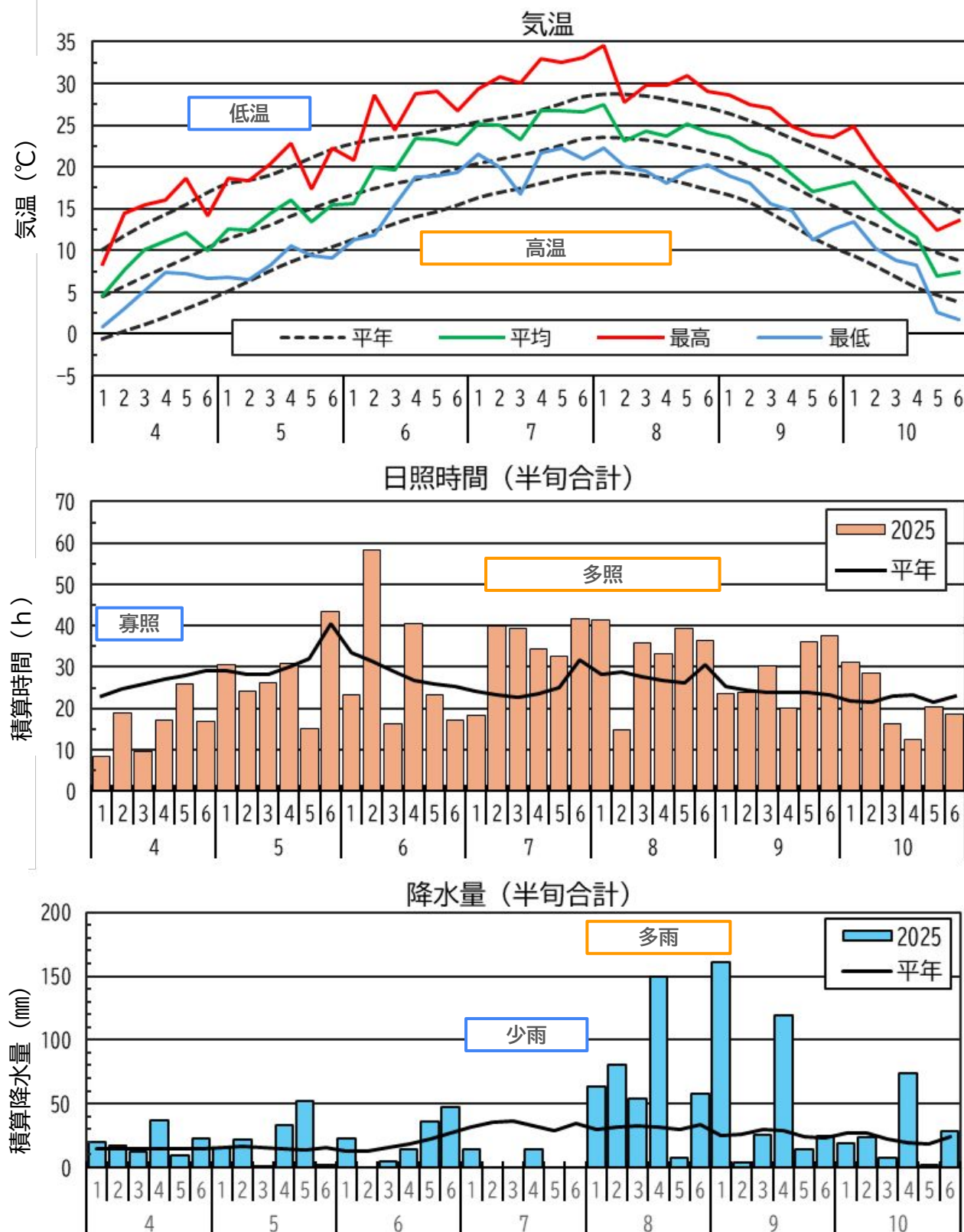




県HPからも閲覧可能です

【作柄】玄米重は平年並、 m^2 当たり着粒数少なく、
千粒重、登熟歩合は平年並

I 本年度の気象経過（アメダス鹿角より）



Ⅱ 今年の生育概況

1) 播種～育苗期

管内の播種作業盛期は、平年より1日早い4月18日でした。4月は1か月をとおして気温が高く、日照時間は少なく推移しました。5月上旬の気温は平年並でしたが、中旬はかなり高くなり、日照時間は平年並であったことから、ハウス内の温度が高温になった施設では葉やけや徒長等が見られました。

また、一部の施設内では高温多湿の影響により、もみ枯細菌病や苗立枯病（リゾプス菌）の発生が見られました。

2) 生育期

管内の田植え盛期は、平年より2日遅い5月24日でした。5月5半旬は低温少照となったため、この頃に田植えを行ったほ場では、苗の活着が不良となり、生育の遅れや代枯れによる株の消失などが見られました。

①草丈・稈長

- 草丈は、田植え後の生育初期は低温少照の影響で平年よりかなり短くなりました。その後は、茎数が少なかったことに加え、6月下旬に少照とそれ以降の高温により、平年より長くなったと考えられます。
- 稈長は、草丈が長かったため平年より長くなりました。倒伏程度は0～3.8とほ場間でバラつきがみられました。
- 分解調査では、ほとんどのほ場で草丈は長くなりましたが、上位節間の伸長が大きかったため、倒伏しにくい状況だったと考えられます。倒伏程度が大きいほ場では第3節間と第4節間の合計が30cmを超えており、株当たり茎数も多くなっていたこと、7月中～下旬頃の夜温が高かったことが倒伏しやすい草姿となる要因になったと推察されます。

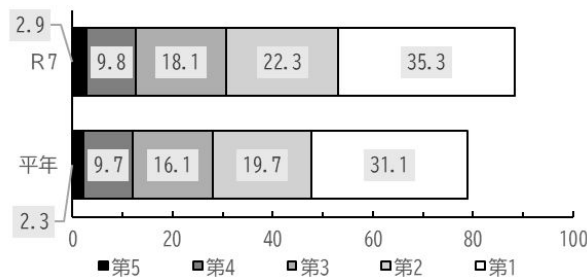
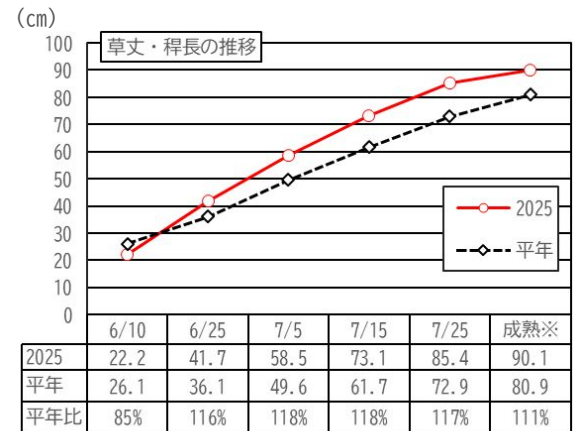


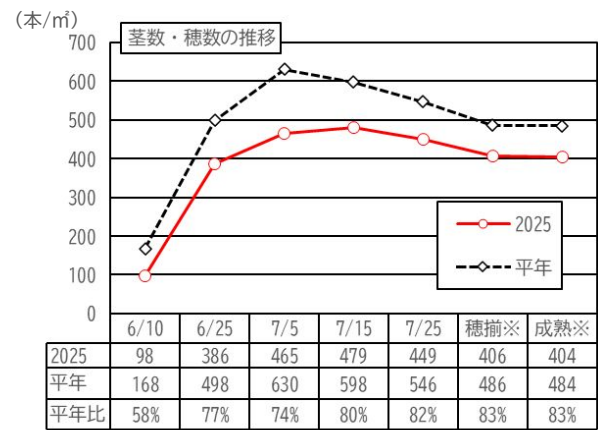
図 節間長の比較（定点あきたこまちR 5地点平均）

②茎数・穂数

- 栽植密度や植え込み本数が平年より少なかったため、初期の茎数が平年より少なくなりました。
- 田植え時期の低温により活着が遅れ、6月10日の茎数は平年よりかなり少なくなりました。
- その後、6月中旬以降の高温により生育が良好となったことで、茎数は増加しましたが、初期の茎数がかなり少なかったため、最終的な茎数も平年より少なくなりました。
- 茎数が少なく推移した事で、穂数も少なくなりました。



※稈長



※穂数

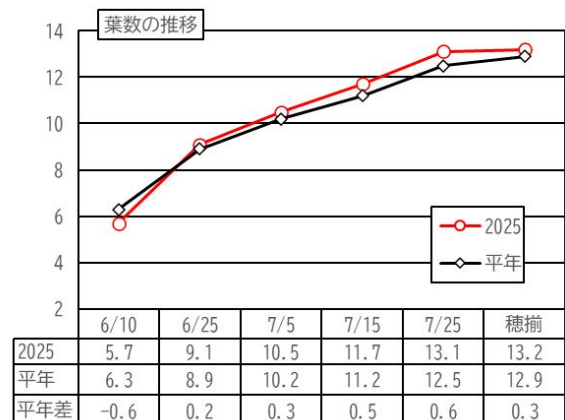
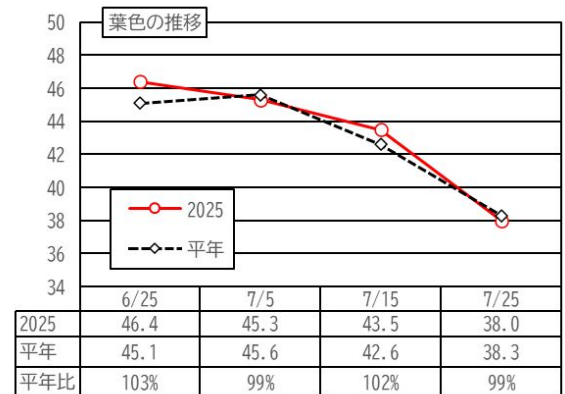


図. 生育の推移（定点あきたこまちR 5地点平均）

③葉色

- 6月上旬は高温多照となり、その後6月中～下旬は高温だったため、生育がやや進み、6月25日の葉色は平年よりやや高くなったと考えられます。7月5日の生育指数（草丈× m^2 茎数×葉色× 10^{-5} ）は平年比86%と低かったため、7月15日以降の高温多照により生育が進んだ際にも地力が十分あったと推察され、葉色は平年並で推移したと考えられます。

④葉数

- 初期の活着不良の影響により、6月10日の葉数は平年より少なくなりました。その後、6月の高温により順調に生育が進み、7月も高温多照が続き生育が促進された事で葉数の進展が早くなり、平年よりやや多くなりました。出穂期は平年より4日早い7月28日となりました。

Ⅲ 収量構成要素と作柄要因

図 水稻定点調査 収量構成要素の平年比及び前年比

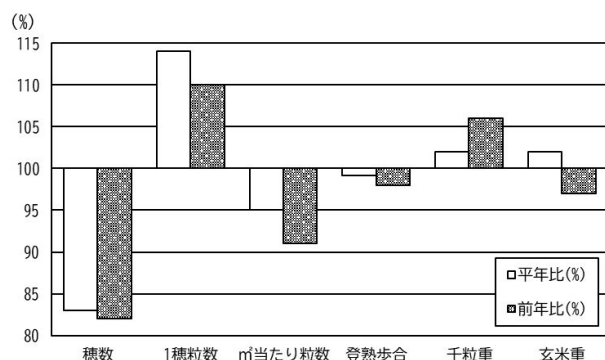


表 水稻定点調査 収量および分解調査結果

	穂数 (本/m²)	1穂粒数 (粒)	m²当たり粒数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	玄米重 (kg/10a)
本年値	404	75.9	30539	84.8	23.0	608
平年値	486	66.3	33382	85.5	22.6	594
前年値	493	69.1	32077	86.1	21.7	628
平年比(%)	83	114	95	99	102	102
前年比(%)	82	110	91	98	106	97

①穂数 ～少ない～

- 生育初期から茎数が少なく、6月以降の高温によりある程度回復し、有効茎歩合も84.6%（平年77.0%）で高かったものの、最終的な穂数は少なくなりました。
- 栽植密度が高かったほ場では、穂数を確保できましたが、栽植密度が低かったり、植え込み本数が少なかったほ場では茎数が少なくなり、穂数に影響したと考えられます。

②一穂着粒数 ～多い～

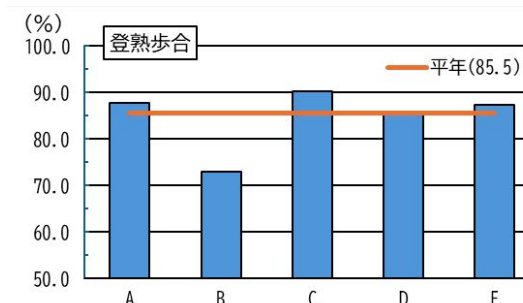
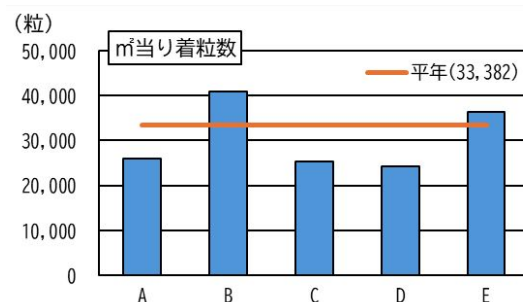
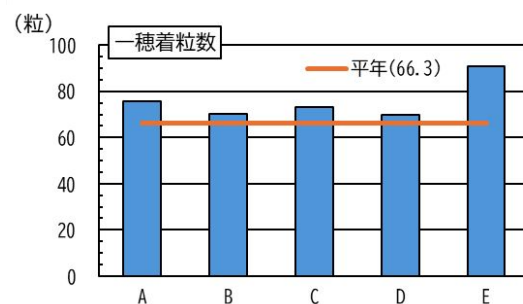
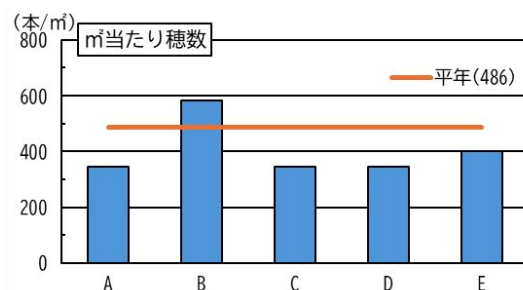
- 茎数が少なくなったほ場では、7月15日の幼穂形成期～減数分裂期頃の葉色も平年並を維持していたため、一穂着粒数が平年より多くなったと考えられます。

③m²当たり着粒数 ～少ない～

- 穂数が少なかったため、一穂着粒数が多かったもののm²当たりの着粒数は少なくなりました。
- 地点Bのほ場では、植え込み時の株当たり本数が多く、m²当たり茎数が多く推移したことにより、穂数も多くなり、m²着粒数も多くなりました。

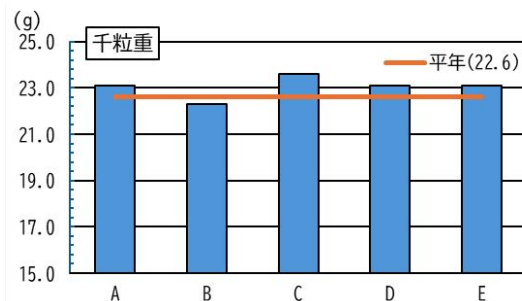
④登熟歩合 ～平年並～

- m²当たり粒数が少なく、葉色が平年並で、8～9月の気温が高く、日照も良好だったことから登熟は順調にすすみ平年並となりました。
- ただし、地点Bでは、紋枯病の発生や下位節間の徒長の影響により、早期から倒伏が発生しました。それにより登熟に影響を及ぼし、登熟歩合が大きく低下しました。



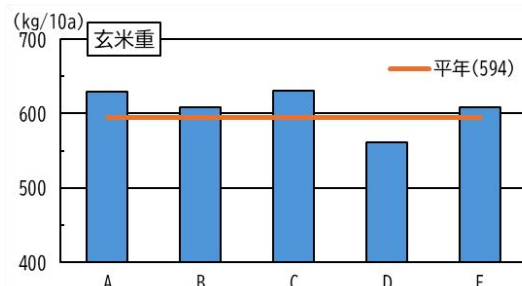
⑤千粒重 ～平年並～

- m²粒数が少なく、出穂期以降は概ね高温多照の期間が続いたため、粒の形成が順調に進み平年並となりました。早期に倒伏した地点Bでは、登熟に影響が発生したため、くず米が多くなり千粒重も低下しました。
- 地点Cでは、減分期追肥により、粒の充実が図られたことで、千粒重が大きくなったと見られます。



⑥玄米重 ～平年並～

- 定点ほ場においては、平年並となりました。
- 管内の収量は、ほ場により差が生じており、田植え後の活着が不良となったほ場や、幼形期を過ぎても中干し状態となっていたほ場、7月の渇水の影響を受けたほ場等では収量が減少したと推察されます。
- 地点Bでは、倒伏の影響により登熟歩合、千粒重が低下しましたが、m²当たり粒数が多かったため、玄米重は平年並となりました。
- 地点Dは、田植え時の栽植密度が低く、その後の穂数も少なくなったため、登熟歩合、千粒重は平年並となりましたが、玄米重は小さくなりました。



Ⅳ 米の農産物検査結果 ～1等比率97.6%（10月末現在）～

10月末までのJ Aの農産物検査では、1等比率（水稻うるち玄米）は97.6%となりました。

主な落等要因としては、着色粒（斑点米カメムシ類、その他）が一番多く65.2%、次いで形質（充実度、心白及び腹白）、被害粒（胴割粒、発芽粒、その他）が多くなっています。

Ⅴ 病害虫の発生状況

1) もみ枯細菌病

育苗期間前半の気温が高く推移し、ハウス内が高温多湿となりやすくなったことから、一部のハウス内で発生がみられました。

近年多発傾向にある育苗期間中の病気です。発症すると坪状に萎凋して枯死します。症状のある苗の葉を引っ張ると力をかけなくても抜けてくる状態となります。発症後の治療薬はありませんので、予防に努め、発症した場合は、発症した苗箱をハウス外に出して処分し、移植に使用しないようにしましょう。

2) いもち病

葉いもちの発生

6～7月は高温多照で少雨の期間が続いたことからBLASTAMによる感染好適日は確認されませんでした。適期防除を行ったほ場では発生は少なかったと考えられます。

穂いもちの発生

病害虫防除所の調査では、葉いもちの7月5半旬の県北部での発病株率は平年並で、発病地点率はやや高い状況でした。そのため、8月上旬以降に降水量が多くなったことから、発病株があるほ場やその周辺ほ場では、発生量は多くなったと考えられます。

3) 斑点米カメムシ類

病害虫防除所から7月18日に防除対策情報第7号が発表されました。管内では6月から7月にかけて高温となり、7月には少雨となったため、斑点米カメムシ類の繁殖に好適な条件となり、雑草地での発生量は多くなったと推察されます。その後、8月は降水量が多くなったこと、適期での防除が行われたことにより、水田内への侵入量は平年より少なかったと考えられます。

しかし、水田内に雑草が繁茂しているほ場では、侵入量は多くなり斑点米被害発生に繋がったと推察されます。

4) イネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）

一部の地域で多発が見られました。防除圧の低い地域では年々発生量が増加しており、生育初期の幼虫発生時から発生量が多くなる傾向にあります。無防除の場合は、成虫発生時期（6月上～下旬）以降もふ化した幼虫による葉の食害を受けており、多発したほ場では生育に影響が出ました。

VI 次年度に向けて

令和7年は、田植え時期の天候が不安定で多くのほ場が活着に影響が出て茎数不足になりました。近年は栽植密度や植え込み本数が低下傾向にあり、田植え時の活着不良が発生した場合に大幅な収量低下を引き起こす原因となっています。

また、令和7年は7月の降水量が平年と比べかなり少なくなり、用水不足となる地域が発生しました。あきたこまちRはカドミウム低吸収性品種のため、カドミウム吸収抑制対策の湛水管理が不要となります（**それ以外の品種では対策が必要です**）。適切な水管理を行い、地域全体で用水の活用が出来るようご協力をお願いします。

1) 土づくりの励行

①**耕深の確保**:近年、耕深が浅くなる傾向にありますが、根域が狭いと根張りが不十分になるため、15cm程度を確保しましょう。ただし、深耕により下層のやせた土が混入したり、逆に根張りが良くなり生育過剰になる場合があるため、深耕する際は、1. 下層土の条件を十分に把握して耕深を決める、2. 一挙に行わず、年数をかけて徐々に深くする、3. 有機質や土づくり肥料、三要素の施肥量を多めにする、等の点に留意してください。

②**地力の維持・増強**:持続的な営農に向けて、土壤養分を適正な範囲に長期的に維持していくため、定期的な土壤診断により、バランスの良い土壤養分の維持と適切な肥培管理を行いましょう。

2) 適切な育苗・田植えによる収量の確保

①**苗の種類や育苗様式に応じた適正な育苗管理を実施**

箱当たりの播種量に適した育苗日数として、健苗育成に努めましょう。

中苗は乾籾100g/箱で育苗日数は35～40日、稚苗は乾籾180g/箱播きで育苗日数は20～25日(加温)、高密度播種苗は乾籾250g/箱で育苗日数は25日程度(無加温の場合)とします。

②**70株/坪植えで収量確保を**

栽植密度が低い場合、気象条件により分けつが確保出来なかった際に、大幅な収量減のリスクがあります。安定した収量確保には栽植密度の確保が重要です。収量570kg/10aを目指した場合、目標の穂数は415～450本/㎡となります。苗1本あたり5本の穂が出穂すると仮定すると、収量確保には70株/坪が必要な計算になります。

また、植え付け時に過度に深く植え込むと、分けつの妨げになりますので、適切な植え込み深(中苗で2.5cm)を目指して作業を行ってください。

③**水管理による分けつの発生促進**

活着後は基本的に浅水管理とし、水温と地温を高めて日較差を大きくします。このため、できるだけかん水は水温の低い早朝に短時間で終わるようにし、日中は止め水とすることで、地温と水温の上昇を促進しましょう。

※高密度播種苗の育苗、田植についての詳細は、美の国あきたネット掲載の、「無加温出芽 高密度播種育苗のポイント」を御参照ください。

3) 高温対策

高温下でも根の活性を保ち養水分を十分吸収するには、土づくりが重要です(「①土づくりの励行」も参照)。根域を確保するために作土深は15cmを目標とし、透水性の観点では代かき時に土壌を練りすぎない、品質向上に寄与するケイ酸資材を施用する、等の対策が有効です。

高温に遭遇する期間を短くするには、「あきたこまち」の出穂期は8月5日以降とします。この目標となる時期に出穂させるため、県北の田植え時期の目安は5月15～20日頃(鷹巣・中苗)となります。

出穂当初は水を多く必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水管理となります。その後、気温30℃以上になる場合は、かけ流しや水の入れ替えで地温を下げると、根の機能減退防止となります。

あきたこまちRは、カドミウム吸収抑制対策が不要ではありますが、幼穂形成期頃(7月中旬)まで中干し状態となっているほ場が見られました。近年は、高温多照の影響で生育が早くなる傾向にありますのでイネの生育段階に合わせた適切な水管理に努めてください。

出穂期前後に用水が不足する恐れがある場合

湛水困難となるほど用水が不足している場合は、溝切り跡への通水により土壌水分を補給してください。ただし、穂揃い期前後のイネは吸水量が大きいので、かん水不足でイネが萎れないよう注意してください。

4) 雑草防除

適切な防除により、水稻への雑草害を防ぐのはもちろんのこと、斑点米カメムシ類対策としても水田内雑草の徹底防除は重要です。薬剤の特性に合わせた使用を心がけましょう。

① 一発処理除草剤(以下、一発剤)

一発剤の多くは、殺草限界葉齢がノビエ2.5～3.0葉となっていますが、効果の安定のためには、ノビエ2.0葉期頃までの散布が望まれます。このため、時期の目安としては代かきから10日以内の散布が効果的です。

雑草は代かき後に発生し始めることから、代かきから田植えまでの期間が長くなると散布適期の日数が短くなるので、作業は計画的に行いましょう。

② 中・後期除草剤(以下、中・後期剤)

一発剤の使用後、雑草が残った場合には、早めに中・後期剤の使用を検討しましょう。

中・後期剤は、発生している雑草の種類を確認して選択しましょう。また、稲の葉齢及び雑草の葉齢を確認し、散布適期を逃さないようにしましょう。

③ 初期剤を使用する場合

雑草の発生が多いほ場や、冷水掛かりのほ場などでは、初期剤と一発剤の体系も有効です。この場合、初期剤は田植え以降に使用し、初期剤散布10～14日後までを目安に一発剤を散布してください。

初期剤は、一発剤よりも殺草限界葉齢が低いため、代かきから田植までの期間には、より一層注意が必要です。

中・後期剤同様、発生する雑草の種類に効果のある剤を選択してください。

5) 病害虫防除

① いもち病防除について

育苗箱施用剤使用時は、高密度播種苗の場合、使用箱数の低減により、本田移植時に10aあたりに投入される薬剤量が減少するため、**防除価が低下する恐れがあります**。使用する箱数に応じて、薬剤の登録を確認し、調整してください。側条施用剤を使用すると効果が安定しますので、高密度播種苗移植栽培や疎植栽培の場合は状況に応じて薬剤を選択してください。

② 斑点米カメムシ類の防除について

近年は温暖化の影響により、斑点米カメムシが増殖しやすい環境にあります。あきたこまちは割れ粳の発生率が高くなる傾向があるので、斑点米カメムシ類の本田内への侵入により斑点米被害が増加しやすいので、防除を徹底してください。

ア. 耕種的防除

農道・畦畔の草刈りは6月上旬から稲の出穂する15～10日前までに複数回行います。8月には、出穂期10日後頃の茎葉散布剤の散布から7日後までに草刈りを行います。その後の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行ってください。併せて本田内の雑草防除対策も徹底します。

イ. 薬剤防除

出穂期10日後頃にアルバリン/スタークル粉剤DL・液剤により防除を行います。水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科の雑草やヒエが発生している場合や、休耕田、法面等の斑点米カメムシ類の繁殖地に隣接したほ場では出穂期24日後頃に追加でキラップ粉剤DLまたはキラップフロアブル、エクシード粉剤DLまたはエクシードフロアブルのいずれかにより防除を行ってください。

薬剤散布の際は養蜂業者と連携し、農薬被害防止の徹底を心がけてください。散布の際は蜜蜂の活動時間を避け早朝や夕刻に散布してください。

！クモヘリカメムシの発生について！

病害虫防除所から発生予察情報特殊報第1号として、クモヘリカメムシの発生情報が発表されました。本種は本県で未発見だった種であり、イネへの加害が多発すると斑点米被害だけではなく、しいなや屑米が多くなる可能性があります。厳冬期（2月上旬）の気温が4.7℃以下の地域では越冬できないため、現在までに県北部での発生は確認されていませんが今後の情報に注意してください。

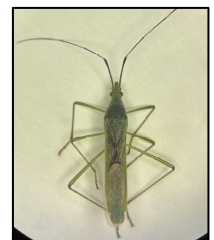


図 クモヘリカメムシの成虫

③ イネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）の防除について

育苗箱施用剤によりイネミズゾウムシとの同時防除が可能なため、使用する薬剤の登録を確認し、高密度播種等による使用箱数低減に注意して防除を行ってください。

産卵盛期（6月上～中旬）頃の卵塊数が1株当たり0.5個を超える場合は減収の恐れがあるため、6月中旬頃に茎葉散布剤による防除を行ってください。地域によっては特定の薬剤への感受性が低下している個体が発生している可能性があります。防除についての詳細は関係機関にお問い合わせください。